

令和元年6月14日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04210

研究課題名(和文) 学校より見る植民地期朝鮮の教育に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on education of colonial Korea from the viewpoint of school

研究代表者

國分 麻里 (KOKUBU, Mari)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：10566003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の研究成果として、次の3点を挙げる事ができる。1点目は、研究成果を文章にして公表した事である。2点目は、研究成果を外部的に報告した事である。3点目は、研究成果の目録を作成した事である。1点目については、「福岡高等女学校の『東アジア』移動」(2019)、「東アジアに生きる市民の育成」(2016)などを挙げる事ができる。2点目の報告については「植民地期朝鮮における児童の創氏改名・学校100年史卒業生名簿の「改名」を中心として」などがある。3点目は、学校の沿革・写真・回想録・教員および児童生徒の様子を中心に、学校100年史の内容を目録として作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、植民地期朝鮮の初等学校の状況を学校100年史などを中心とした学校資料から明らかにすることができた。これにより、教育制度や政策、朝鮮総督府関係の資料、教科書など、教育を行なった側からの資料からしか今まで明らかに出来なかった植民地期朝鮮の教育を、学校の側から問い直すものであった。4年間の研究では学校100年史を中心に学校資料を収集することができなかったが、学校の沿革や当時の写真、回想録、教員や児童生徒の状況などから、植民地期の朝鮮における学校教育の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：There were three main results of this study as follows: The first was publications of papers, such as Graduates from Fukuoka Girls' High School Moving into East Asia (2019), Development of Citizenship for People Living in East Asia (2016). The second was a presentation about children's sousei-kaimei in the international workshop, History of education and language in late Choson and Colonial era Korea (2016). The third was development of the list of school's 100th anniversary memorial magazines, including time table of school, photos, memoirs, and so on.

研究分野：近現代朝鮮教育史

キーワード：植民地期朝鮮 教育 学校 児童・生徒 100年史 写真 回想録 沿革

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

そもそも植民地期の学校教育がどのように行われてきたのか。教育制度や政策、朝鮮総督府関連の法令や教科書、教員状況など教育政策的な部分は明らかにされているものの、実際に教育を行なう学校側からの植民地期の教育については明確になっているとは言えない。学校側からの研究の成果があまりないのは、朝鮮戦争や学校増改築による資料の償却や紛失などにより資料収集の困難があるからである。

2. 研究の目的

本研究で着目するのは開校 100 年目を迎えた学校で作成される学校 100 年史である。韓国では 1990 年代以後、開校して 100 周年を迎えた学校では次々と 100 年史が編纂されている。100 年史自体は二次資料であるが、学校の沿革、当時の写真など一次資料もあり、教員や児童生徒の状況、回想録なども記録されている。こうした資料を手がかりにして学校や地域を分析することで、植民地期の教育を行なう側の学校がどのように教育を行っていたのかを明らかにすることができる。これが本研究の目的である。

3. 研究の方法

まず、これまで韓国で収集した学校 100 年史の植民地期の内容を整理する。その際の分析の重点として、(1)学校の沿革、(2)植民地期当時の写真、(3)教員や児童生徒の状況、(4)回想録、(5)その他とする。韓国で主に長期休業中に、ソウルや釜山など大都市を中心に、国立国会図書館、国立中央図書館、公共図書館などを回り資料収集および状況を把握した後、大都市および地方都市での学校や地域での資料収集を行なう。

4. 研究成果

1 年目である 2015 年の目的は、それまで収集した 100 年史の整理と新しい資料収集であった。2015 年度は次の 2 つの研究活動を行った。1 つ目は資料調査であり、2 つ目はそれまで集めた資料に基づく報告である。まずは、韓国国立中央図書館を中心にして学校 100 年史および植民地期朝鮮の学校教育に関する資料を収集した。さらに、済州島では国立済州大学中央図書館、公立タムナ図書館および公立ウジョン図書館を訪問し、済州島における学校 100 年史や地域に関連する資料を収集した。次に 2 つ目の報告についてである。1 年目の研究成果として次の報告を行った。2016 年 2 月 20 日に九州大学で行われた国際ワークショップ(History of education and language in late Choson and Colonial era Korea)において、植民地期朝鮮における児童の創氏改名に関する報告を行った。これは、それまで収集した学校 100 年史の内容から、特に創氏改名を一部分析したものであり、政策面からではなく児童の創氏改名の側からその実態の一端を明らかにしたものであった。

2 年目となる 2016 年度の目的は、ソウルや釜山などの大都市を含めて多くの地域を回り、そこでの学校 100 年史を探し、植民地期の学校の様子を明らかにすることであった。この目的に対して、次の 3 つの成果を挙げることができる。1 点目は、韓国において学校 100 年史の収集が進んだことである。次の日程で資料調査を行い、100 年史の中で植民地期の朝鮮の学校状況を示す個所の収集をしてきた。4 月 1 日～4 月 4 日は釜山、7 月 17 日～7 月 20 日はソウル、8 月 12 日～18 日は釜山である。4 月と 8 月に調査をおこなった釜山では、釜山広域市立市民図書館・釜山広域市立中央図書館などで資料の収集を行った。7 月のソウルでは、国会図書館や国立中央図書館において未収集の 100 年史の情報を入手する

とともに、詳細に記述のある学校の地域についての市史や村史などの文献調査を行った。加えて、研究分担者と研究協力者の参加により、国内も含めて資料収集の幅が広がることができた。2点目は、100年史に描かれた植民地期朝鮮における児童生徒の様子を創氏改名を中心に明らかにし、文章としてまとめることができたことである。科研1年目に九州大学の国際ワークショップ(History of education and language in late choson and Colonial era Korea)で報告した創氏改名の内容を基に朝鮮半島・台湾から見た創氏改名を考える教材を作成し「東アジアに生きる市民の育成」(唐木清志編『「公民的資質」とは何か - 社会科の過去・現在・未来を探る - 』(2016 東洋館出版社)に掲載した。3点目は、1年目に引き続き、九州大学の国際ワークショップ(KOREAN EDUCATION AND LANGUAGE HISTORY WORKSHOP, 1875-1950)において報告したことである。報告内容は、筆者のそれまでの研究成果にここ数年の新しい知見を加えたものであった。

3年目となる2017年度の目的は、韓国の地方都市を中心に多くの地域を回り、そこでの学校100年史を探し、植民地期の学校の様子を探ることであった。この目的に対して、以下の2つの成果を挙げることができる。1点目は、3年目の目的であった韓国の忠清道および江原道を中心に植民地期を経験した学校100史の収集が進んだことである。2017年度は以下の2つの日程で資料調査を行い、植民地期朝鮮の学校の状況を示す個所の収集をしてきた。(1)5月18日～21日は江原道原州および春川、京畿道水原での資料調査である。この調査では今まで入手できなかった江原道の原州および水原の100年史の収集を行い、特に原州小学校では朝鮮の児童の当時の学校生活を知る資料を入手した。(2)8月16日～20日は、忠清道の堤川およびソウルでの資料調査である。ここでは、忠清道の堤川市錦城面陽化里で学校史を収集している地籍博物館の李鎮昊館長の説明を聞きながら、書堂および植民地期前後の教育に関する資料収集を行った。加えて、国会図書館や国立中央図書館において100年史以外の未収集の資料を入手することができた。2点目は、関連の研究成果の報告ができたことである。2017年11月18日に韓国の清州にある韓国教員大学校において行われた2017年度4地域史学会共同国際学術大会にて本研究の関連の成果を報告することができた。

最終年度である2018年度は、今まで調査を行ったことのない地域での資料調査と論文作成を行なうことが目的であった。1点目の資料調査では、初めて全羅道北部で調査を行うとともに、慶尚南道釜山での追加資料を収集することができた。(1)全羅道での調査は8月に1週間ほど地域調査を行なった。事前の日本での資料整理を経て、全羅北道庁の資料館で市史などを閲覧して全体像を把握した。その後、全州・益山・光州・高敞での学校100年史および植民地期の教育についての資料調査を行なった。そこでは植民地期に関する地域資料を収集することに努めた。特に高敞では、地域に住む案内人を得ることができて、学校の訪問や歴史館の見学、植民地期の地域の話を知ることができたのは大きな成果であった。加えて、全羅道に向かう前日と日本帰国日のソウルでは、韓国国立中央図書館にて全羅道に関連する植民地期の教育雑誌および新聞記事を閲覧し、資料の補完をすることができた。(2)12月に5日間ほど釜山で地域調査をおこなった。それまでの釜山の調査では初等を中心に資料を収集していたが、今回は中等教育を中心に調査を行った。前近代に釜山地域の中心地であった東來の中等学校での歴史館での資料収集や、釜山市立広域市民図書館において関係資料の収集を行った。2点目の論文作成については、2017年度に韓国の国際学術大会で報告した「福岡高等女学校卒業生の『東アジア』移動」に、2018年度で調査した高敞での人物内容を追加し論文を作成した。

以上、4年間の研究において、本研究の研究成果として以下の3点を挙げる事ができる。1点目は、研究成果を文章にして公表した事である。2点目は、研究成果を外部に向けて報告した事である。3点目は、研究成果の目録を作成した事である。1点目については、「福岡高等女学校の『東アジア』移動」(2019)、「東アジアに生きる市民の育成」(2016)などを挙げる事ができる。2点目の報告については「植民地朝鮮における児童の「創氏改名」-学校100年史卒業生名簿を手がかりにして-」などである。3点目は、学校の沿革・写真・回想録・教員および児童生徒の様子を中心に、学校100年史の内容を目録として作成した事である。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

- ・國分麻里「福岡高等女学校卒業生の『東アジア』移動」2017 4
「
」韓国教員大学校、2017年11月18日。
- ・國分麻里「植民地朝鮮の郷土教育の展開 - 1932・33年編『普通学校國史』の「朝鮮事歴」を中心に - 」国際ワークショップ「KOREAN EDUCATION AND LANGUAGE HISTORY WORKSHOP,1875-1950」,九州大学、2017年2月26日。
- ・國分麻里「植民地朝鮮における児童の「創氏改名」-学校100年史の卒業生名簿を手がかりにして-」国際ワークショップ「History of education and language in late Choson and Colonial era Korea」,九州大学、2016年2月20日。

〔図書〕(計2件)

- ・國分麻里「福岡高等女学校卒業生の「東アジア」移動 - 『香蘭会誌』における同窓会活動を中心にして - 」梅野正信・斉藤利彦・市山雅美・高吉嬉・國分麻里・金恩淑・徐鐘珍・呉文星、梅野正信科研報告書『植民地被統治民衆子弟生徒のアジア認識及び日本認識の変遷に関する総合的研究』2019、238-248頁、総261頁。
- ・國分麻里「東アジアに生きる市民の育成」,唐木清志編『「公民的資質」とは何か - 社会科の過去・現在・未来を探る - 』東洋館出版社、2016、126-135頁、総166頁。

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：金 玹辰

ローマ字氏名： KIM HYUNJIN

所属研究機関名：北海道教育大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 10591860

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。